

人物から読む

幕末史の最前線

町田明広

Machida Akihiro

はじめに

歴史の叙述とは、執筆者による「解釈」に基づいたものである。例えば、「小松・木戸覚書」(いわゆる薩長同盟^{さつちよう})について、直接的な史料は尺牘^{せきしやく}(龍馬裏書^{りようま})のみしか残されていない。これは、木戸孝允^{たかよし}(桂小五郎^{かつらごろう})が慶応二年(一八六六)正月に交わされた「小松・木戸覚書」の内容について、六カ条にまとめて坂本龍馬に確認を求め、相違ないと龍馬が朱書で返答したものである。同じ史料を見ている歴史家の間でも、軍事同盟であったのか、歴史的意義はどの程度のものなのか、意見が分かれており、今なお論争となっている。そうした「解釈」の違いが、歴史の叙述にも大きく反映されることになる。

「解釈」の違いが生じる原因は、どこにあるのだろうか。それは、「解釈」する際に着目する史料や先行研究の違いであり、その読み込みの程度の差である。また、「解釈」の対象となる歴史的事象について、その周辺事情に関するものを博搜^{はくそう}(史料・文献などを広範囲

にわたって探し求めること）するレベルや、研究の深化の度合いからも生じるものである。

「小松・木戸覚書」で言えば、筆者は尺牘（龍馬裏書）を「解釈」するために、中央政局における朝廷や幕府の動向、薩摩藩や長州藩の内部状況などについて、可能な限り関連するものを博搜している。それらを総合的に調査・研究することによって、「小松・木戸覚書」の実相や歴史的意義を「解釈」している（拙著『新説 坂本龍馬』参照）。

人物の叙述においても、執筆者それぞれの研究成果から導き出された「解釈」を基に叙述される。人物から歴史を叙述する機会は数多いが、その際にはさらなる配慮が必要であろう。そもそも、執筆者は自らが選定する人物に対して、何らかの興味関心があるはずであり、その人物に対するイメージは、プラスに傾いていることは否めない。人物を通して歴史を叙述する場合、その人物の好悪や先入観を極力遠ざけ、客観的にその人物をとらえることが必要である。人物顕彰に陥ってはならず、マイナス部分にも目配りすべきである。

ところで、筆者の研究にも様々なキーマンが登場する。人物を通じて歴史を叙述するところが、研究上の特徴の一つとなっている。近世から近代への変化が、本質的にどのような内容を持つ変化だったのか、それはどのような人々によって、どう担われたのかといった問題認識が研究をする際の意識の基底に伏流している。では、筆者の人物研究の在り方を

分析視角・研究手法の観点から説明してみよう。

分析視角として、思想や行動をその人物の個性のみに求めるのではなく、それらを規定した同時代の秩序・觀念や政治・經濟・社会・文化といったすべての生活領域に及ぶ規範から、人物を丁寧^{ていねい}に説き起こすことを意識している。また、研究手法としては、伝説化された側面が強い人物については、主として一次史料に基づいて虚構を排除し、歴史に埋もれた無名に近い人物については、史料群の中から再発見し、実像を体系的に明らかに描き出すことを主眼としている。その上で、俯瞰^{ふかん}的にその人物の歴史的な意義を探ることに結びつけようと心がけている。

つまり、伝説化された人物には、政治史と人物像の乖離^{かいり}を正しく認識し、人物把握と政治史との照合を丹念に行い、政治史における人物評価をやり直すことによって、歪^{ゆが}んでしまった政治史に矯正を施す必要がある。一方で、歴史に埋もれた人物については、政治史における人物発見を行い、人物研究を実証研究へ取り込み、実証研究における人物的視角の重要性を十二分に意識しながら、人物研究から見える新たな政治史を構築する必要がある。いずれも、人物論が政治史の研究に必須であることを強く示している。こうした分析視角・研究手法を用いて、人物研究を行うことによって、政治過程そのものの検討を深化

させることができるかと確信している。

本書で扱う人物は、井伊直弼・吉田松陰・ペリー・徳川慶喜・平岡円四郎・島津久光・渋沢栄一・松平容保・佐久間象山・坂本龍馬・五代友厚という、綺羅星のような多士済々の一人である。今回は、人物から読む幕末史の最前線と銘打った新書にふさわしく、比較的なじみがあると思われる人物を取り上げてみた。とは言え、名前はそこそこ知られているものの、いざ幕末維新史にどのような足跡を残した人物で、その存在意義は何だったのかを問われると、意外にも答えにくいのではなからうか。

例えば、五代友厚である。五代と言え、もともと明治時代初期の大阪経済を立て直した人物であり、明治十四年政変で北海道開拓使官有物の払い下げ事件にかかわった悪役として、教科書にも必ず登場した人物であった。さらに、ドラマで取り上げられたことによつて、一気に知名度は増したものの、その理解はこれまでの域を出るまでには至らなかった。しかし、五代の幕末期の活躍は筆紙に尽くし難いレベルであり、五代の事績を紐解くことで、あらたな幕末維新史の側面が浮き彫りになってくる。本書では、その事実を最新研究の動向とともに明らかにしたい。

五代に限らず、本書ではその人物の生涯を必ずしも網羅的に紐解くのではなく、その人

物に関する最新の研究動向からトピック的な側面を抽出し、当時の政治動向にも目配りしながら、読者の皆さんに新たな幕末維新史の知見を提供できればと考えている。なお、今回はオンラインメディアJBpressで連載したものをベースにして、大幅に加筆訂正を加えている。

本書の目的は、伝説化された人物、また無名に近いとは言えないが、その事績が歴史に埋もれた人物を取り上げ、それぞれの人物を通じて幕末維新史の最前線をお示することである。新しい政治と人物論に触れていただき、幕末維新史のユニークさ、面白さをあらためて感じていただければ幸いである。

目次

はじめに

3

第一章

井伊直弼

——植民地化から救った英雄か？

15

イメージが先行する井伊直弼／井伊直弼の生い立ちと藩主就任／將軍継嗣・条約締結問題と大老就任／井伊大老の始動と条約問題／条約調印を巡る直弼の態度／作られた直弼像とその実像／一橋派の敗北と戊午の密勅／安政の大獄／桜田門外の変の実相とその意義

第二章

吉田松陰

——長州藩の帰趨を左右した対外思想

吉田松陰は悲劇のヒーローか／吉田松陰の生い立ちと少年時代／青年時代の活動と脱

33

第三章

マシュー・ペリー

——日本開国というレガシーを求めて

藩／下田渡海事件と松村村塾／安政の大獄と松陰の死／長州藩の対外思想（認識）の系譜／松陰を形作る皇国思想と陽明学／松陰の行動原理／下田渡海事件に見る松陰の対外思想／即時攘夷から未来攘夷へ／松陰に大きな影響を与えた佐久間象山／松陰のペリー刺殺目的説を否定する／象山の対外思想／未来攘夷から読み解く下田渡海事件／松陰の死とその遺伝子／松陰の積極的開国論／通商条約の締結と松陰の即時攘夷化／裏目に出た松陰の至誠／安政の大獄と松陰の刑死

幕末の起点はペリー来航／ペリーとは何者か／ペリーはなぜ日本にやって来たのか／ペリー艦隊の出航／ペリー来航と早く帰った理由とは／ペリーの再来航はなぜすぐだったのか／幕府・阿部正弘の対応「ぶらかし」／老中阿部正弘の言路洞開の方針／日米和親条約の締結とその内容／日米和親条約によって開国せず／日米和親条約とアヘン戦争の関係とは／幕府外交は弱腰にあらず／ペリーにとっての和親条約

第四章

徳川慶喜

——真の姿が見えにくい「強情公」

徳川慶喜の人物像／慶喜の生い立ちと斉昭の謹慎／斉昭の復権と慶喜の一橋家相続／將軍継嗣問題の勃発／一橋派の動向と通商条約問題／井伊大老の登場と慶喜の謹慎／慶喜の復権と文久の改革／慶喜の上京と周旋の失敗／禁裏御守衛総督への就任と禁門の変／慶喜に対する幕府の警戒と朝廷の信頼／慶喜による長州再征・通商条約の勅許獲得／幕長戦争と慶喜の宗家相続／慶喜の裏切りと將軍就任／慶喜の政局運営と兵庫開港問題／四侯会議と慶喜による幕政改革／大政奉還と慶喜の決断の背景／王政復古クーデターと慶喜の立場／戊辰戦争の開戦と政治家・慶喜の退場／慶喜の政治生命の終焉と評価

第五章

平岡円四郎

——慶喜の政治活動を支えた周旋家

知られざる偉人・平岡円四郎／平岡の生い立ちと二人の父親／平岡の一橋家への仕官／將軍継嗣問題と平岡の立場／平岡円四郎・橋本左内・西郷隆盛の連携／平岡円四郎の「慶

喜公御言行私記」／安政の大獄と平岡の挫折／慶喜・平岡の復権と中央政局／平岡の中央政局での活躍とその死

第六章

島津久光

——政治の舞台を京都へ移した剛腕政治家

誤解されたままの島津久光／お由羅騒動と斉彬・久光／斉彬と久光の本当の関係とは／斉彬は久光をどのように見ていたのか／斉彬を介した久光と西郷／幕末動乱の導火線となった久光の率兵上京／生麦事件と薩英戦争／朝政参与と久光の挫折／禁門の変と久光の方向転換／久光の「抗幕」「廢幕」と慶喜の將軍就任／慶喜による幕薩融和路線の推進／四侯会議の実相とは／激動の中央政局と久光の退場／久光にとっての明治維新

第七章

渋沢栄一

——農民から幕臣、そしてパリへ

渋沢栄一から見えるもの／生い立ちと渋沢家・家族／青年期の渋沢と尊王攘夷への傾倒／尊王志士・渋沢の誕生／攘夷実行計画と方針転換／一橋家仕官の実相／一橋家仕官

第八章

松平容保

——京都守護職の苦悩と元治期の政局

と薩摩藩との関係／関東下向と天狗党の乱／周旋家から経済官僚への転身／慶喜の將軍就任と渋沢の動向／渋沢の渡仏およびヨーロッパでの動向／渋沢の幕府瓦解・慶喜への不満

会津藩の悲劇／戦国から江戸初期にかけての会津地方／保科正之と会津藩／松平容保とはどのような人物か／松平容保の京都守護職就任／会津藩・松平容保と長州藩の激突／会津藩と薩摩藩の対立はどのように始まったのか／帰藩できない松平容保と江戸からの嫌疑／京都家臣団の日増しの苦悩／松平容保の決断と会津藩の悲劇

第九章

佐久間象山

——暗殺の真相と元治元年夏の流言

流言の飛び交う京都／佐久間象山とは何者か／幕末の俊英を育てた象山／元治元年春の中央政局／流言に含まれた要人死亡のフェイク／天皇動座の流言と象山の上京／フエイクニュースの犠牲になった巨星・象山

第一〇章

坂本龍馬

——活躍の裏には、薩摩藩士としての身分があった!?

通説の浪人・坂本龍馬／薩摩藩はなぜ土佐脱藩浪士をスカウトしたのか／龍馬に期待された使命／藩士の定義とは／長州藩は龍馬を薩摩藩士と見ていたのか／薩摩藩士・龍馬の痕跡／大石団蔵（高見弥一）の事例／近藤長次郎の事例／龍馬は藩主毛利敬親に会っている！

第二章

五代友厚

——幕府を出し抜いたパリ万博への権謀術数

五代友厚という人物／五代の長崎時代と薩英戦争／五代友厚の最先端な上申書／五代と薩摩スチューデント／薩摩スチューデントに課された使命／五代友厚とモンブラン／ベルギー商社の設立／遣欧使節・柴田剛中の密航留学生への対応／五代友厚の憂慮とその結果／近代日本人・五代友厚の誕生／パリ万博と徳川慶喜の思惑／薩摩藩のバリ万博参加と五代友厚／薩摩藩のバリ万博使節団の派遣／万博における幕府と薩摩藩の激突

あとがきにかえて——歴史家が語る幕末大河ドラマ

参考文献

表記は原則として常用漢字、現代仮名づかいに準拠した。また、読みやすさを考慮して引用資料に適宜振り仮名や句読点を補った。

第一章 井伊直弼

——植民地化から救った英雄か？



いい・なおすけ(1815-60)
幕府の大老。彦根藩13代藩主(豪徳寺蔵)

イメージが先行する井伊直弼

井伊直弼^{なおすけ}は誰もが知っている、幕末史における重要人物の一人である。大老として諸外国との通商条約を締結し、一四代将軍を徳川家茂^{とくがわいえもち}にすることで將軍継嗣^{けいし}問題に片を付けた。そして、反対派を安政の大獄で弾圧し、桜田門外の変で暗殺された激動の人生を送った人物である。このような経緯はよく知られているが、彼がどのような思いや判断からそうした事態を招いたのか、そう問われると言葉に詰まるのではないだろうか。

直弼は、評価が分かれる人物でもある。責任を一身に背負いながら、通商条約を結び日本を開国に導き、近代日本の礎^{いしずえ}を作り、日本を植民地化から救ったと英雄視される。その一方で、安政の大獄での苛烈極まりない処断から、血も涙もない専制的な悪人のイメージも付きまとう。読者は、どちらの直弼を思い浮かべただろうか。

これほどの重要人物であり、しかも広く知られているにもかかわらず、イメージ先行で語られてしまう井伊直弼の知られざる実像について、その人生を紐解^{ひもと}いてゆこう。

井伊直弼の生い立ちと藩主就任

井伊直弼は文化一二年（一八一五）一〇月二九日、彦根藩^{ひこね}三五万石の一代藩主である



直弼が不遇の時代を過ごした「埋木舎」。自らを花の咲くこともない(世に出ることもない)埋もれ木と同じだと直弼本人が名付けたという。

直中なおなかの一四男として彦根城内に生まれた。母は側室お富とみの方で、江戸麴町隼町伊勢屋こうじまち はやぶさちやう いせや十兵衛じゆうべえの娘と言われる。当時としては、父は五〇歳、母は三二歳とかなり年齢がいつてからの子であり、直中は既に家督を直亮なおあき(三男、二代藩主)に譲っていた。そのような事情

から、両親は直弼を溺愛したようで、かなり過保護に育てられた。

天保二年(一八三一)、直弼は一七歳となり、井伊家の家風に従って藩から三〇〇俵あてがいはちの宛行扶持あてがいはちをもらい、彦根城中の槻御殿けいぎでんを出て、第三郭くわくわの尾末町おすえちやうの北の御屋敷に移った。この北の御屋敷を「埋木舎うもれぎのや」と名付け、弘化三年(一八四六)に直亮の養子となるまでの一五年間、ここで部屋住みの生活を送った。この埋木舎時代に「なすべき業わざ」として、直弼は禅、居合、兵学、茶道などの教養を積んだ。特に茶道は一級品であり、茶書『茶湯一会集ちやのゆ いちえしゆ』を著した。

さらに、運命的な出会いが待っていた。国学者長なが

野義言（のちに主膳）と知り合い、彼から国学、歌道、古学などを学び、藩主就任後には長野を重用した。直弼はこの長野の協力を得て、將軍繼嗣問題を有利に運び、また安政の大獄を推し進めることになる。

嘉永三年（一八五〇）、直亮の死去により直弼は彦根藩一三代藩主に就任し、掃部頭と称した。そもそも、直弼は一四男であり、藩主の座に就くことなどあり得ないはずだが、井伊家の男子が次々に早逝するなどの条件が重なった。本来、就くはずがない立場、地位に就いた人は、より一層その立場にふさわしい人物でありたいと思い、張り切ってやり過ぎる傾向が見られるが、直弼はその典型かも知れない。それは、大老就任時にも発揮される。

將軍繼嗣・条約締結問題と大老就任

ペリー来航という時代の大転換期において、將軍繼嗣問題という厄介な徳川家の「お家騒動」が起こっていた。事の発端は、一三代將軍の徳川家定は暗愚で病弱であり、この將軍では未曾有の国難を乗り切れないと評価されたことである。そのことを主張するグループは、賢明・年長・人望の条件を満たす一橋慶喜を次期將軍として推したため、一橋派と呼ばれた。一方で、あくまでも血統を第一として、紀州藩主徳川慶福（のちの家茂）を推

したグループは南紀派と呼ばれた。この二つの派閥が形成されて政争を始めたが、見方を変えれば改革派（一橋派）と守旧派（南紀派）の権力闘争に他ならない。

安政三年（一八五六）七月、アメリカ総領事タウンゼント・ハリスは日米和親条約で開港された下田しもだに上陸し、玉泉寺ぎよくせんじを総領事館と定めて直ちに江戸行きを希望した。これは江戸で通商条約交渉の開始を期待したからであり、幕府にとっては来るべきものが来たという感じであつたろう。この時、幕政を主導したのが老中首座さくらの佐倉藩主堀田正睦ほった まさよしであつた。

ハリスの江戸行きの見通しが立たない中で、堀田の指示により、安政四年（一八五七）五月に下田奉行の井上清直いのうえ きよなおらは、日米和親条約の付録協定である日米約定やくじよう（下田条約）を調印している。知られざる条約であるが、極めて歴史的な意義があり、長崎の開港、下田・箱館はこだてでの居留の許可、片務的領事裁判権へんむ（治外法権）などが謳うたわれている。領事裁判権とは、外国人が現在居住する国の裁判権に服さず、本国の法に基づいて本国領事の裁判を受ける権利であり、日米修好通商条約にもそのまま取り入れられ、不平等条約の要因となつた。

ようやく江戸行きを認められたハリスは一〇月一日、江戸に到着し、二一日に江戸城において家定に謁見して、ピアース大統領の親書を渡した。だが、徳川齊昭なりあき（前水戸藩主）



安政5年の日英修好通商条約交渉の際に撮られた写真で、後列左が岩瀬忠震（ビクトリア&アルバート博物館蔵）

をはじめ通商条約へ反対する者もあり、交渉は進捗せず、ハリスはいら立ちを強めた。そこで、艦隊の派遣や戦争の開始を示唆するなど、武力を背景にした砲艦外交をハリスは実行したため、一二月三日に下田奉行の井上清直と堀田老中の懐刀の岩瀬忠震を全権に任じ、交渉が遅まきながら開始された。岩瀬とハリスのぎりぎりのやり取りの結果、安政五年（一八五八）一月一二日に一応の妥結が見られた。しかし、幕府独断で即時調印をせず、条約に反対する諸大名を抑えるために、堀田は朝廷から勅許を得ることにした。ハリスも六〇日間の猶予を与え、その結果を下田で待った。

幕府は堀田を京へ上らせて通商条約の勅

許を求めたが、まさかの孝明天皇^{こうめいてん}の拒絶という事態となる。堀田がむなしく江戸へ戻った三日後の四月二三日、井伊直弼が突如として大老に就任した。一般には、堀田による一橋派の領袖である松平慶永^{しょうへいけいなが}（春嶽^{しゅんがく}、越前藩主^{えちぜんはんしゅ}）の大老就任仕事を南紀派が事前に察知し、老中松平忠固^{ただかた}を味方につけて大奥の取り込みで成功、直弼の大老就任に漕ぎつけたとされる。しかし、將軍家定の強い意向がそこにはあったのだ。家定は、それまでの老中たちが自分を軽視して政治を行うことを不満に思っていたようだ。その点、直弼は家定を立てて忠実であった。家定の信任を勝ち得た井伊直弼は、いよいよ政治の表舞台に登場することになる。

井伊大老の始動と条約問題

幕府は通商条約の勅許の獲得は容易であると考えていたが、朝廷・孝明天皇の思わぬ拒絶に狼狽^{ろうばい}した。そもそも、朝廷は幕府に大政委任しているはずであり、またその台所は幕府からの援助で成り立っていた。朝廷と一蓮托生^{いちれんたくしやう}とも言える幕府の申し出を、いまだかつて拒絶したことがない朝廷の想定外の対応は、幕府にとって大変なショックであったことは疑いない。ただし、孝明天皇は条約勅許に条件を付した。大名の総意であれば、勅許も



ハリス(1804-78) 初代駐日領事として来航。

あり得ると言うことである。

直弼は大老に就任すると、一橋慶喜ではなく慶福を將軍継嗣と決め、かつ通商条約については、堀田らの幕府専断による締結やむなしの意見を退け、あくまでも孝明天皇からの条件である大名の総意を踏まえた勅許獲得に固執した。

直弼は単純な開国派ではなく、むしろ慎重派であり、そして、対外戦争よりも朝廷との軋轢あつれきが

元となった内乱の発生を一層恐れていた。

ハリスは三月五日に江戸に来ており、堀田の帰りを待ちわびていた。四月二四日によろやくハリスは堀田との会談に漕ぎつけた。堀田は不勅許の事実を隠蔽し、大名の総意を得るためとして、さらに六カ月の猶予を希望したため、ハリスも洪々に九〇日間の猶予を認めて下田に戻った。ところが、六月一三日、米国軍艦ミシシッピ号が下田に入港し、アロー戦争（イギリス国旗を掲げた清国船アロー号が清国官憲の取り調べを受け、国旗がひき降ろされた事件を契機として、清とイギリス・フランスとの間で戦われた戦争）におけるイギリス・フランス連

合軍の勝利と、天津条約の締結および両国使節の来航を告げたことから事態は急変する。ハリスは堀田に書簡を認め、^{したた}両国連合艦隊が大挙して江戸湾に来航して、通商条約の調印を迫ることは必至であると伝えた。幕府は窮地に追い込まれたのだ。

条約調印を巡る直弼の態度

ハリスは堀田に対し、イギリス・フランスは日米修好通商条約の草案では調印に賛同しないことは目に見えており、両国に対して既成事実として示すために、至急アメリカと通商条約を締結することを勧告した。安政五年六月一七日、ハリスは軍艦ポーハタンに乗船して下田を出発し、小柴沖^{こしば}（現在の横浜市金沢区柴町^{かなざわ しばちよう}にある小柴海岸の沖合）に碇泊^{ていはく}して再度堀田に勧告を行い、岩瀬忠震らとの会見を要求した。

翌一八日、それに応じて岩瀬・井上清直は米艦に赴いて、ハリスと談判に臨んだ。岩瀬はハリスに対し、日米が結んだ通商条約をイギリス・フランスが万が一拒否した場合、ハリスが調停者となって幕府と両国の斡旋^{あつせん}をする誓約書を求めた。何とも都合が良い話だが、ハリスは条約締結を急いでおり、それに同意したため、誓約書を受け取った岩瀬らは直ちに江戸城に戻った。

今後の方針を決めるべく、一九日に江戸城中で大評議となったが、想像以上に混迷を極めた。現実を直視できずに逡巡^{しゆんじゆん}し調印の先送りを唱えた直弼を、岩瀬らは罵倒した。大老にそのような態度を取ったことが、のちに岩瀬らの命取りになることを彼らは気がついていない。直弼は、まだハリスとの約束の猶予期間が四〇日ほど残っており、その間に勅許を得て、さらには岩瀬ら海防掛^{かいぼうがかり}などの敵対者の一掃を密かに企んでいたのだ。

結局、直弼の裁断は勅許を得るまでの調印延期であつた。しかし、岩瀬・井上は再び米艦に赴き、なんとその日のうちにハリスと日米修好通商条約一四カ条・貿易章程七款に調印した。この時、岩瀬らは調印延期の交渉を一切していない。勅許獲得に固執した直弼が、一方では全権委任した岩瀬らに窮した場合は調印をしてもよいとの言質^{げんち}を与えたため、実行されたというのが真相である。

結果論ではあるものの、外患から解放された直弼の政治的な主眼は内政一本に絞られていく。さしあたって、岩瀬らの弾圧・追放であり、その流れは安政の大獄につながっていく。

作られた直弼像とその実像

安政五年六月一九日、結果として、井伊直弼は調印内諾の言質を岩瀬らに与え、怒濤の一日を終えて藩邸に戻った。直弼は最も信頼する側近の一人である宇津木六之丞^{うづきむくのじやう}に対して、岩瀬らとの城中での激論、すなわち再派遣に至る経緯を説明した。宇津木が内諾の撤回を求めたのに対して、「公用方秘録^{こうようかたひろく}」写本（『開国始末』）によると、直弼は「勅許を待たざる重罪は、甘んじて我等荅人に受候決意につき、また云う事なかれ」と論じた。

この一言は、井伊を肯定する場合に必ず引用されてきた言葉である。同時代人の勝海舟^{かつかいしゆう}も、この言葉から、直弼は「大丈夫」と高く評価している。直弼は剛毅果断^{こうきかだん}の性格で、我が国を開国に導き、欧米列強の植民地化から日本を救った偉人とするイメージも、ここから出発しているのだ。斯^かくいう筆者も、直弼の一身に責めを負うその姿勢に感銘を覚えた一人である。

しかし、昭和六〇年（一九八五年）代になって、彦根藩の公式記録「公用方秘録」写本は改竄^{かいざん}されていたことが判明した。実際のやり取りは、真実と大きく異なるのだ。公開された『公用方秘録』オリジナルの写し（「木俣家本^{きまた}」）によると、宇津木は、朝廷から言われた通り、調印が諸大名の総意を確認してからではなかったため、朝廷をないがしろにしたと批判する者がそこかしこに現れ、また、孝明天皇の逆鱗^{げきりん}に触れると直弼を諫めるように

直言した。

宇津木の指摘に対し、落ち度に気づき、後悔する直弼の言葉が残されていた。「無念の至り、身分伺いするより致し方ない」。直弼は、その点に気がつかなかったことは残念であるとし、大老職の辞任すらほめかしている。これまでの井伊直弼のイメージとは一線を画するものであり、剛毅果断さを感じることは難しいのではなからうか。英雄譚とは違った、直弼の人間臭さを感じられる。それにしても、直弼は評価が難しい。

ところで、事実上の通商条約締結の推進者は岩瀬忠震である。彼は目付・海防掛・外国奉行として安政五カ国条約（アメリカ・オランダ・ロシア・イギリス・フランス）すべての交渉を主導し、実際に署名している。開国の恩人は直弼ではなく、本来は歴史から忘れられている岩瀬である。もちろん、最終的な責任を負ったのは直弼、その人ではあるのだが。

一橋派の敗北と戊午の密勅

安政五年六月一九日の日米修好通商条約を皮切りに、井伊直弼は同年中にオランダ・ロシア・イギリス・フランスとも調印、安政五カ国条約を締結した。実際の交渉や署名をしているのは岩瀬忠震であるが、最終的な責任を負ったのは上司にあたる直弼であった。こ

れ以降、直弼の政治姿勢は激変する。反対勢力を粉碎すべく、政治権限を最大限に行使したのだ。

六月二三日、直弼は堀田正睦・松平忠固の両老中を罷免し、無断調印の罪を被せた。同日に一橋慶喜と対面すると、違勅である無断調印について詰問された。翌二四日に徳川斉昭、尾張藩主徳川慶勝、水戸藩主徳川慶篤は江戸城に無断で登城し、直弼による条約の無断調印を面責した。また同日、松平慶永も登城して老中久世広周に將軍継嗣発表の延期を求めた。直弼は二五日に慶福から名を改めた家茂の継嗣発表を実行し、七月五日には慶喜に登城停止、斉昭・慶永らに隠居・謹慎を命じ、ここに一橋派の敗北が確定した。

直弼による政敵排除の嵐が吹き荒れる中で、水戸藩・斉昭による巻き返し工作が秘密裏に進められていた。そして八月八日、いわゆる「戊午の密勅」事件が起こる。孝明天皇はこの密勅の中で、勅許がないにもかかわらず、幕府が通商条約に調印したことを強く非難し、御三家および諸藩には幕府に協力して公武合体の実を挙げることに、また幕府には攘夷推進の幕政改革を成し遂げることを命令した。

それまでの幕府に大政委任をしていた政治体制を、朝廷自らが否定して水戸藩に天皇の命令である勅諭が下賜されたのだ。この勅諭は諸藩にも写しが内々に配られており、極

めて意義深い事件である。

そもそも、朝廷と大名は直接接することは禁止されており、朝廷から下される官位のやり取りなどもすべて幕府を経由していた。ましてや、勅命が幕府を飛び越えて諸藩にもたらされることなど、言語道断な行為であった。幕府にとっては、朝廷と結びついた勢力に政権を奪われる可能性も出てくるわけで、これだけは許せない政治案件なのだ。

本来の勅諭は、関白の裁可を経て幕府に伝達されるものであるが、今回は関白をスキップして幕府でなく水戸藩に下賜されるという前代未聞の形式であり、内容的にも幕府の面目は丸つぶれであった。

安政の大獄

戊午の密勅は、水戸藩を中心とする朝廷工作によるもので、井伊直弼は徳川斉昭が黒幕と睨^{にら}んで、徹底的な捜査を命令した。これこそが、安政の大獄の始まりである。結局、斉昭の関与は証明できなかったものの、捜査範囲は広がり続け、未曾有の大弾圧事件に発展し、処罰者は一〇〇人を超えることになった。主な処罰者を見ておこう。隠居・謹慎となつたのは、一橋慶喜、徳川慶篤、徳川慶勝、松平慶永、伊達宗城^{だてむねなり}（宇和島藩主^{うわじま}）、山内豊信^{やまうちとよしげ}

(土佐藩主)、堀田正睦といった諸侯クラスと、川路聖謨(江戸城西丸留守居)、大久保忠寛(江戸城西丸留守居)といった幕臣も含まれる。

死刑・獄死となったのは、吉田松陰(長州藩、斬罪)、橋本左内(越前藩、斬罪)、頼三樹三郎(京都町儒者、斬罪)、梅田雲浜(小浜藩、獄死)、日下部伊三治(薩摩藩、獄死)らであった。特筆すべきは水戸藩への処罰であろう。安島帯刀(水戸藩家老、切腹)、鵜飼吉左衛門(水戸藩、斬罪)、鵜飼幸吉(水戸藩、獄門)が犠牲となっているが、家老まで断罪されるなど、苛烈を極めた。もちろん、黒幕の徳川斉昭も永蟄居とされており、これが桜田門外の変の誘因となる。ちなみに、岩瀬忠震(作事奉行)、永井尚志(軍艦奉行)ら幕臣も免職・差控となった。直弼は、有能な幕府の人材まで処罰してしまったのだ。

直弼の矛先は宮・公家にまで及んでいる。青蓮院宮(隠居・愼・永蟄居)、近衛忠熙(左大臣、辞官・落飾)、鷹司輔熙(右大臣、辞官・落飾・愼)、鷹司政通(前関白、隠居・落飾・愼)らが処分された。戊午の密勅に直接かわりがなくても、反幕府姿勢を問われた者もいた。安政の大獄によって、橋本左内をはじめとする近代日本のリーダーシップを取れる人材を多数失ってしまった。一橋派を中心とした挙国一致的国家構想はここに潰え、革新的かつ現実的な内外政略や適材適所の人事政策に則った、日本のもう一つの近代化の可能性が

断たれたのだ。

桜田門外の変の実相とその意義

安政七年（一八六〇）三月三日、桜田門外の変が勃発した。大老就任以来、疾風怒濤の政局を牛耳ってきた井伊直弼の死は、あまりにも突然であった。襲撃犯は水戸藩から一七名、薩摩藩から一名の浪士一八名であった。彼らは大雪の中で身を潜めて、直弼の行列が来るのを待ち伏せた。森五六郎が駕籠訴を装って行列の供頭に近づき、制止しようとした供侍に即座に斬りかかり、護衛の注意を前方に引きつけた上で、黒澤忠三郎がピストルを駕籠めがけて発射した。これを合図に浪士本隊が全方向からの駕籠への抜刀襲撃を仕掛けた。

ところで、事件から約一カ月後に実行犯の一人である関鉄之介から聞き取った生々しい情景が、鳥取藩士の安達清風の日記に記述されている。それによると襲撃の際、「同志ト示シ合セ相図（合図）ノヒストン（ピストル）ヲ打出シ」たところ、供の者たちは直弼の乗った駕籠を放して退いた。そこで駕籠の戸を開けたところ、「ヒストンノ玉（弾）胸先ニ中リテ死シ居リヌ」と、弾が命中して井伊は既に絶命しており、引きずり出してズタズ



「桜田門外之変図」。襲撃者のひとり蓮田市五郎が、事件直後細川家中御預中に描いたもの(茨城県立図書館蔵<茨城県立歴史館保管>)

タに切りつけて、直弼の首を唯一の薩摩藩士である有村次左衛門ありむらじざえもんが討ち取ったという。実は、直弼は通説とは違って即死状態であったのだ。

この時に使用されたピストルは、ペリー艦隊が嘉永七年（一八五四）、再度来航した際に將軍や幕府閣僚などに贈呈した最新型コルトM1851を徳川斉昭が入手し、藩内で模倣して製造したものであった。まさに、斉昭と直弼は刺し違えたといっても過言ではなからう。

さて、この暗殺劇が成功した要因であるが、井伊家側の油断が考えられる。藩邸から江戸城は至近距離であり、藩士二六人を含む総勢六四人が供をする嚴重な警戒下であった。こ

ここに切り込んでくるとは想像でできず、隙が生じていた。しかも、悪天候のため刀には柄袋つかを着装しており、すぐに抜刀できず戦闘態勢が取れなかったこと、事前の警戒を促す注進も無視していたことも重なった。なお、戦闘で犠牲となった藩士は八名おり、二年後に重傷者六名は藩領・下野しもつけのくに佐野のへ流され揚屋あがりやに幽閉され、事件当時の軽傷者は切腹、無傷の者は斬首という厳しい処分が科せられた。

幕末維新に起こった数多くの暗殺事件の中で、唯一、政局に重大な影響を与えた大事件が、この桜田門外の変であった。それだけ、井伊直弼の存在は大きいのだ。幕末の騒乱さわらんが本格化し、明治維新が加速度的に早まる契機となった、まさに時代を動かした稀まれにみる日本史上の暗殺劇である。

人物から読む

幕末史の最前線

町田明広

発行：集英社インターナショナル（発売：集英社）

定価：1,012 円 (10%税込)

発売日：2023 年 12 月 7 日

ISBN：978-4-7976-8132-1

ネット書店でのご予約・ご注文は [こちらからどうぞ！](#)